

特集

特集／開発途上国における図書館の役割と支援活動

開発、知識、そして図書館——開発途上国における図書館の機能を考える

竹内比呂也

●はじめに

図書館（情報サービス機関を含む）が社会的機関であることは言をまたないが、その様相はそれが存立する社会によってずいぶん異なるだろう。例えばイギリスの公共図書館とわが国の公共図書館が表面的には似ているように見えても社会における認知や利用者のニーズに基づくサービスが違っているように、その国の文化、習慣、ことばや社会・経済状況の影響を図書館は受ける。経済的状況において厳しい環境に置かれている開発途上国においては図書館の整備は後回しに考えられがちであるし、また開発途上国においては先進国のようなサービスは望むべくもないと考え、図書館が提供するサービスを制限的に考える人たちもいるかもしれない。しかし筆者は、開発途上国であるからこそ図書館の社会的機能を最大限に拡張して考える必要があり、むしろ先進国では強調されなくなっているような機能を見直し再評価しなければならないのではないかと考えている。なぜなら、先進国では図書館以外にも図書館が果たしう

る機能を代替するメカニズムがあるが、開発途上国ではそのような代替メカニズムが必ずしも備わっていないからである。いずれにせよ、開発途上国における図書館の役割について論じるには、まずそれらの国々で何が問題になっており、図書館がどのような形で貢献しうるのかを明らかにしていかなければならない。

●開発のための知識と情報

世界銀行の一九九八／九九年次の *World Development Report*（邦訳『世界開発報告』）には *Knowledge for Development* という題がついている。この報告書では、開発途上国における様々な問題の根源を知識不足に求め、「知識ギャップ」(knowledge gap) と「情報不全問題」(information problems) という二つの視点から開発と知識の問題をとらえている。ここでいう知識ギャップとは、農業、医療・保健などの技術的知識（ノウハウ）の不均衡な分配を指しており、情報不全問題とは、製品の質、借り手の信用度など属性についての知識の不平等な分配を指している。また国際連合が主催する

「世界情報社会サミット」は情報社会におけるあらゆる問題を扱うとしているが、その議論の中心には情報通信技術の発展に伴って顕在化した開発途上国と先進国との情報領域の格差（いわゆるデジタルバイド）の問題があった。

従来から情報源の偏在によって生じている情報アクセス格差という南北問題があったが、インターネットをはじめとする情報通信技術が進展することにより、この問題の解消が期待されていたと思われる。しかしながら情報通信技術の発展は、結果的にはこれまでの格差をさらに大きくしたというのが現状の概観であろう。このような状況に対応するために、上記の『世界開発報告』では「世界的に知識を獲得し、応用し、自ら知識を創りだすこと」、「人的資源に投資して、知識を吸収・利用する能力を高めること」、「技術に投資して、知識の獲得と吸収の両方を促すこと」によって知識ギャップを解消することを提案しているが、図書館の役割については具体的には述べられていない。一方、世界情報社会サミットの原則宣言（二〇〇三年二月）においては、

情報アクセス環境の悪い地域で図書館を含む諸機関が、インターネットへのパブリックアクセスのためのサービスポイントとなること、パブリックドメインとして扱われる記録情報を保存し、アクセスを提供すること、特に開発途上国においては、情報社会の促進のために積極的な役割を果たすことが求められている。

●開発と図書館

図書館の基本的機能は、言うまでもなく、知識を記録したメディアを収集して利用者に提供することにある。ここで問題にしているような知識ギャップや情報格差の問題、あるいは開発と情報の問題は、以前から図書館をベースとする議論のなかで論じられてきたものであり、目新しいものではない。例えば国際連合の専門機関の中で唯一図書館そのものを活動対象領域としているユネスコでは、二〇〇一年から「みんなのための情報計画」(Information for All Programme)が実施されているが、これも図書館のような情報基盤を基礎としたものであり、その前身であるUNISIST計画、総合情報計画においても開発に資する図書館という位置づけで事業が推進されてきた。

しかしながら、開発の問題を論じる中で、知識や情報あるいは図書館の機能や役割が広く知られてきたかという点必ずしもそうではない。図書館はそれがなければ人々の命にかかわるものとは言えない。開発途上

国において様々な領域で開発に関わる人たちと一緒に仕事をした経験から言えば、彼ら、特に開発途上国のオフィサーたちの多くは、図書館の開発を他の社会的な開発プログラムに優先して行わなければならないものとは見なしていない。確かに食糧や水の供給、あるいは識字などの基礎教育の領域でのプログラムは人の生活の質の向上に直結している。図書館はそのようなものとは異なるといふ見解を理解できないわけではない。最低限のライフレインを確保することに必死な人々を前にして図書館の重要性を説くことがどれほどの意味を持つかは疑問である。

しかしながら、情報社会を論じた幾多の著作を引くまでもなく、知識や情報は社会における資源であり、もはや生活を維持するために欠かせないものとなっている。知識や情報は人の生活を変える力を持っている。それゆえに知識を伝えるための「万人のための教育」の必要性が訴えられ、学校をつくるのが奨励されてきたのではない。しかし、知識の伝達の方法としての教育プログラムの陰に隠れて、情報や知識を効果的に伝える手段としての図書館の機能は十分に考慮されてこなかった。社会基盤としての図書館の重要度は強調しすぎてもしすぎることはないはずである。しかしながら、図書館といえは読書のため「だけ」の機関であると考えている人たちは多い。

●図書館の持続的効果

図書館の機能は、開発促進に対して即効性を持つものではないかもしれないが持続性はあるはずである。教育の場としての図書館を学校教育やワークショップなどと対比させて考えてみよう。学校教育では、教師が限られた時間に教室にやってくる、そこに座っている児童生徒、あるいは学生に知識を伝える。そこには持続的なインタラクティブな関係が作られるという利点があるが、授業のスケジュールは受講する側の都合に必ずしも合っていないという欠点がある。ワークショップなどは学校教育に比べれば限定された期間にしか開催されず(しかも多くの場合講師側の都合によって日程が設定される)、持続的な知識の提供は期待できない。どんなに優れたワークショップであっても、そこで示された新しい知識が定着する過程を支えるメカニズムがなければ、その効果は半減するのではないだろうか。一方図書館という場合は、利用者に一定程度の選択の自由を与える。すなわち、利用者は、自分の都合に合わせて図書館に行くことができ(もちろん開館時間という制約はある)、自分のペースで勉強して知識を身につけることができる。もしコレクションが定期的に更新されていけば、利用者は知識を常に新しいものとしていくこともできる。

●国レベルの開発と図書館

社会における図書館機能としての情報や知識の伝播を考えると、情報や知識の持つ商品的価値が大きな障壁となる可能性がある。通常の商品を考えたときには、高級品と普及品があるように、マーケットの経済力に見合う製品開発が可能であろう。また生産コストを下げる努力をすれば低価格化を図ることができ、競争原理がそのような方向に企業を動かす大きな動機となる。しかしながら、情報や知識は競争によって価格が下がるような商品ではないところに、経済的な格差、とりわけ国レベルの格差を乗り越える難しさがある。

これについては、国レベルの科学技術の振興について考えてみよう。多くの開発途上国で科学技術の振興こそが国家発展の礎であると考えられ、それを支えるために科学技術情報センターを設置し、国内機関や研究者に対して科学技術情報を提供してきた。各国の科学技術情報センターでは、国内で生産される科学技術情報の流通拠点として、利用を促進するためのさまざまな二次資料が整備されるのと同時に、海外の二次資料を提供する努力がなされてきたものの価格の問題が隘路となってきた。近年HINARIプロジェクトのような支援プログラムによって、学術雑誌が多くの開発途上国で利用可能となったが、その背景には学術雑誌の電子化とインターネットの普及

がある。開発途上国のすべての機関でインターネットが使えるわけではなく、IT大国と言われるインドにおいてすら、インターネットの利用人口は全人口比で約三・五%（二〇〇四年度、国際通信連合の統計による）にすぎない。しかしながら、国の主要な機関では、インターネットでの利用はかなり普及しており、HINARIのようなプロジェクトは知識の伝達における地域格差の解消に役に立つに違いない。

●コミュニティ開発と図書館

コミュニティ開発において図書館はどのような力をもつだろうか。ユネスコの図書館情報サービス開発プログラムにおいてかねてから行われてきたコミュニティ学習資源センターを例に考えてみよう。

農山村の小さなコミュニティには学校以外にはこれといった公的な施設もなく、電話もコミュニティのごく一部の家（場合によっては役所や郵便局だけ）にしかないような状況で、ラジオが情報伝達の主要なメディアとなっている。コミュニティ学習資源センターは、ただ単にそこに図書館を作るという目的で設置されるものではなく、識字や女性開発などそのコミュニティにとって必要なプログラムの実施と組み合わせで計画される。例えば、ある農作物を多く作っている村では、その生産性の向上のための専門家による技術支援と農業技術に関する資料の整備が並行して行われる。そう

することにより、専門家が去った後も資料を使って知識を強化したり、不明確な点を確認したりすることができる。

●コミュニティにおける社会的記憶

上記のようなプロジェクトでは、図書館（やそれに類似する機能を持つセンター）がコミュニティにおける窓として外部の知識を取り込むために機能している。特に農山村のコミュニティを考えた場合、その生活を向上させるような知識や情報は、多くがコミュニティ外で生産されているだろう。国レベルで見た場合には、多くの研究成果が先進国で生産されており、開発途上国がそれらを取り入れてきたのと同じ構図である。しかしながら、開発途上国であっても、そこには独自の文化があり、記録されうる何らかの文化的生産物を持っている。それらの価値は、それぞれの文化において決められるべきものであり、また、それらは後世に残されていくべきものである。文化の多様性については、インターネットのようなグローバルな基盤が世界を席卷するようになってからますますその重要度を増している。インターネット上のグローバルコミュニティにおいては、マスとしての情報発信力の強いものが生き残るのであり、そのなかで、マイナーな文化が抹殺されるとまでは言わないまでも、無視されかねない事態が出来しかねないからである。これらの

コミュニティ固有の文化的活動の記録を残していけるのは、コミュニティに存立する図書館に他ならない。

●この社会にも読書を楽しむ人たちはいる

図書館が読書を求める人たちにに対してサービスをする場であるという点はまさしく万国共通である。これについて忘れがたい思い出をいくつか記しておきたい。かつて調査のためにバングラデシュを訪問したが、その際バングラデシュ図書館協会がユネスコの支援で行っていた農村のコミュニティ支援プロジェクトの現場にも足をのびた。首都のダッカから舗装の悪い道を車で一時間以上移動し、その後船に乗り換えて、さらに三〇分近くゆられたであろうか。赤茶けた土の丘の上に、トタン葺きで外壁もトタンでできた、立派とはいえない建物があった。聞こえてきたのは子供たちの声で、そこは小学校であった。その隅に小さな学校図書館があった。図書館といっても本当に名ばかりで、小さなキャビネットが数個、そこにわずかの本があるだけであった。バングラデシュ図書館協会の人たちが、一抱えの本を持って入っていくと目を輝かせた子供たちが集まってきて、奪い合うように本を持っていき、ベンチに座って楽しそうに読み始めた。おそらくはテレビなどがほとんどないコミュニティで子供たちの知的な喜びは読書にしかないのだろう。先進

国に住む多くの子どもたちと比べれば、彼らは決して恵まれているとは言えない環境にあったとしても、そこには驚くほど強い読書の機会を求める基本的なニーズがあるのである。

このような例はどこにでもあるだろう。タイのある少女は、わが国の有名なボランティア団体がスラムの中で運営する図書館にやってきて毎日本を読んでいったという。そして高等教育機関への進学を実現した。彼女は「そこで夢をもらった」と語っている。ハノイの町外れの国道の道端でスイカを売る青年は、炎天下で店番をしながら本を読んでいた。このような若人の姿は、どこの国にも見られるのではないだろうか。それは人間としての根源的なニーズなのであり、このようなニーズを支えるのはまさしく図書館である。

●図書館を超えて—開発途上国にも押し寄せる電子情報の波

最近タイのバンコクには Thailand Knowledge Park (＝TKPark) と名付けられた情報サービス拠点がある。このTKParkは、伝統的な図書館機能と情報技術をミックスさせた、いわゆるハイブリッド図書館の形をしたサービス拠点であり、その目的は読書の振興と生涯学習機会の提供にある。TKParkでは印刷資料のコレクションが整備され貸し出しサービスが提供される一方で、画像や音響を駆使したマル

チメディア（ヴァーチャルリアリティ）環境が提供され、インターネット端末もある。施設のイメージも従来の図書館とは異なり、ずいぶんポップな感じである。タイの図書館では、国立図書館がすでにインターネット端末を設置して市民に提供しているものの、それ以外の公共図書館のほとんどが伝統的なサービスに終始していた。このような全く新しいコンセプトを打ち出して、一足飛びに先進的なサービスに移行した感がある。また今後このようなTKParkをタイ国内の各地に設置する計画があり、このような施設がどのように評価され、発展していくのか、興味深いところである。

図書館が提供した知識や情報が、具体的に開発に役に立ったということを実証するのは難しい。しかし、図書館は静かにそして確実にその役割を果たしている。また、情報通信技術の発展に伴い、開発途上国においても、その様相を変えつつある。今後のさらなる発展に期待したい。

（たけうち ひろや／千葉大学文学部助教授・附属図書館ライブラリーイノベーション・センター「LIC」リサーチフェロー）

《参考文献》

世界銀行著・海外経済協力基金開発問題研究会訳『世界開発報告一九九八／九九』開発における知識と情報』東洋経済新報社一九九九年。